

特別支援学級在籍児童がクラスの先生になれる 5 分間

～フラッシュ教材を作って授業をしよう～

居場所作り・フラッシュ教材・インクルーシブ教育・合理的配慮・ICT の活用

伊丹市立瑞穂小学校

〒664-0013
兵庫県伊丹市瑞穂町 3 丁目 5 0 番地 1

<http://www.s-mizuho.itami.ed.jp>

1. 研究の背景

本校では、36 名の児童が特別支援学級に在籍しており、通常学級19学級中全ての学級において交流および共同学習を行っている。

特別支援学級では、自分の考えをはっきりと話し積極的に活動に参加する児童も、交流学級では、自分に自信が持てず大人しく過ごしていたり、目立つことは好きだが、どうやって自分を出していけばよいかわからず、悶々としていたりする。また、友だちに認めてもらおうと間違った目立ち方をして、いつも注意される児童もいる。交流学級の中で特別支援学級児童にみんなから認められるような活躍の場を作りたいと思い研究を進めることにした。

特別支援学級の児童が交流学級で安心して共に学び生き生きと活動するためには、交流学級の中にその児童の居場所を作ることが大切である。そして、「自分はみんなの役に立っている」「自分の存在意義を実感できる」というような自己有用感を高められる機会を日々の学習活動の中に組み込むことでインクルーシブ教育システムが構築できるものとする。障害者の権利に関する条約 24 条によれば、『インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするための目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要』とされている。本研究ではタブレットを使ってフラッシュ教材を作成し、交流学級で児童自らが授業を進める。クラスの友だちに問題を出し、みんながそれを答える活動によって、特別支援学級児童がクラスを中心になることができると考えた。

これまででも、パソコンを使ってパワーポイントでフラッシュ教材を作成する試みをしたことはあったが、特別支援学級の児童がパワーポイントを使いこなすのは難しかった。しかしタブレットを使うと、アイデア次第で容易に教材作成が可能となる。タブレットを使うメリットは、撮影、編集、発表が一度にできるという点にある。例えば理科室の実験器具名のフラッシュ教材を作成するには、従来であればデジカメで撮影して、それをパソコンにつないで、パワーポイントで作成する必要があった。それが、iPadだと、理科室で児童が撮影し、そのままKeynoteでフラッシュ教材を作成することができる。まだタブレットが導入されていなかった本校で、支援の必要な児童がタブレットを使用するという合理的配慮を行うことで、「特別支援学級在籍児童がクラスの先生になれる5分間」が実現できると考えた。

2. 研究の目的

1番の目的は、特別支援学級在籍児童の居場所作りである。本実践により、クラスの友だちに心から「すごいね」と言われ「自分はみんなの役に立っている」と思えるような体験をさせたい。そのためには、特別支援学級の児童自身にどうすればみんなの役に立てるかと真剣に考えさせることが大切である。そこで教材作成を教師がしてしまうのではなく、子どもが考えたアイデアを自分の力で形にしていく。もし、教師が全て教材作成をしてしまい子どもはタップするだけになると、その子はやりがいを感じることができない。発達段階、能力、障害の状況を考慮した上で、その子の最大限の努力を教材作りに反映させることにより、友だちからの「すごいね」の一言に心から喜ぶことができ、自己有用感が高まると考えている。

さらに、この取り組みを進めることは、学力向上とICT機器の活用能力の育成にも役立つと考える。アメリカ国立訓練研究所の「ラーニングピラミッド」によると、最も効率の良い学習方法は他人に教えることだといわれている。特別支援学級の児童は、友だちから教わることはあっても、他人に教える経験は少ない。この取り組みによって他人に教える経験を積ませ、児童自身の効率の良い学習にも繋げていきたい。

3. 研究の経過

特別支援学級の児童が活動をするためには、見通しを持つことが重要となる。図1のサイクルを表1のように学期毎に繰り返すことにより、児童は見通しを持って主体的に取り組むことができた。

図1：研究のサイクル

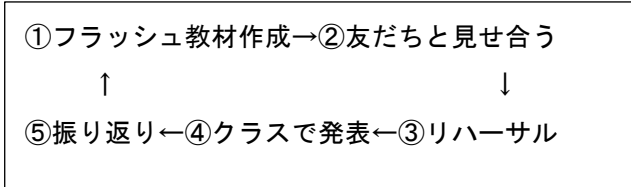


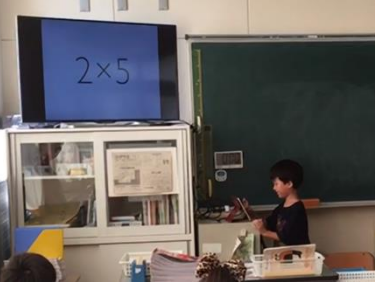
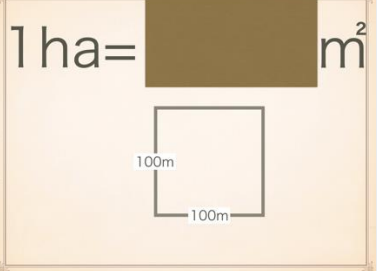
表1：研究の経過

時期	取り組み内容	詳細
5月	iPad購入 職員研修 (特別支援学級教職員) ① フラッシュ教材作成	助成金によりPadを6台購入した。 特別支援学級教職員の中で、一年間の計画を再確認し、iPadを使ってどんなことができるのか研修を行った。 自立活動の時間に、本実践の概要を説明した。まずは教師が作成したフラッシュ教材の見本を見せ、その作り方を教えた。 iPadを初めて触る児童もいたので、Keynoteの使い方から文字の入力の仕方までを丁寧に教えた。各学年の漢字ドリルを使って、それぞれの新出漢字の読み方を問うフラッシュ教材を作成した。その後は各自で個別の学習の時間に作成した。
6月	② 友だちと見せ合う ③リハーサル	作ったフラッシュ教材を使って、特別支援学級の友だち同士で問題を出し合った。 数名の教師の前で、リハーサルを行った。
7月	④クラスで発表	交流学級の担任と時間を調整して、クラスで発表をした。 どの子も最初は緊張していたが、クラスの友だちからのリアクションが心地良く、表情がどんどん明るくなっていった。

	⑤振り返り	自分が発表した様子を撮影した動画を見て、振り返りを行った。「次からはもっと大きな声を出す」「下を向いていたから、次は顔を上げてみんなの方を向いて発表する」「友だちを指名するときは、もっといろんな人を当てるようにする」など、自分で個別に次の目標を立てることができた。
8月	職員研修(全教職員)	本実践の経過説明と、それ以外にも様々なiPadの使い方ができることを共有した。この研修会を機に、体育大会や普段の授業でiPadを活用する教師が増えた。
9・10月	① フラッシュ教材作成	自立活動の時間を使って、1学期にそれぞれが発表した様子を見せ合い、次の教材作成に活かすことができた。
11月	②友だちと見せ合う ③リハーサル	特別支援学級児童の同級生だけでなく、他学年の教材も見せ合った。低学年の児童にとっては高学年の問題を解くことが楽しかったようで、意欲的に取り組むことができた。低学年の児童にとっては数年先の学習内容を楽しみながら予習することができ、高学年の児童にとっても、わかりやすく教えることで自分自身の理解も深まった。 管理職や数名の職員を招待し、リハーサルを行った。特に学校長の前でリハーサルを行った時にはとても緊張していた様子だったが、その経験が発表の時の自信に繋がった。
12月	④クラス発表 ⑤振り返り	1学期に比べて、落ち着いて発表することができた。 動画を見た反省だけでなく、クラスの友だちからの感想やリクエストも参考に振り返りを行うことができた。
1・2月	①フラッシュ教材作成 ②友だちと見せ合う ② リハーサル	3度目になると、ほとんどこちらが介入しなくても自分たちで進めることができた。自分で入力できない児童の分は、どんなことをしたいのかを聞き出し、友だちが手伝う姿も見られた。
3月	④クラス発表 ⑤振り返り	一年間に学習した内容を復習できるフラッシュ教材を作成した。スムーズに教材作りができるようになってきたため、長時間の発表になった児童もいた。 1学期と3学期の発表の動画を見比べ、自分の成長を感じることができた。

4. 代表的な実践

図2：代表的な実践

		
1年生 ひらがなの読み方 絵や写真を使用することで、1年生でも集中して楽しく学習に取り組むことができた。	2年生 かけ算の九九 提示するスピードを調整し、心地よく答えられるよう工夫した。人に合わせることが苦手な児童が、みんなに合わせようと努力する姿が見られた。	3年生 市内巡り 社会見学の動画を使用した。「教科書で見るとよりも実際にやってきた所が見られて覚えやすかった」という感想が出た。
		
4年生 都道府県名 勉強は苦手だが都道府県は全て暗記している児童が作成した。得意分野を発表することで生き生きと活動することができた。	5年生 面積の公式 マジックムーブを使い、平行四辺形を動かして長方形にし、面積を求める手順を分かりやすく解説することができた。	6年生 歴史上の人物名 資料集にある歴史人物シールを使い教材を作成した。顔をイメージして名前を覚えると頭に入りやすくなると好評だった。
		
全学年 漢字の読み 新出漢字の熟語を漢字ドリルから選んで作成した。簡単に作成できるため、一番最初に取り組んだ。	全学年 単位の換算 児童のアイデアにより、下にヒントを付けた。これにより、苦手だった児童から「〇〇君のおかげで理解できた」と感想をもらった。	全学年 理科の実験器具名 理科室で作成した。自分たちが使った道具が映されることで、イメージしやすかったという感想が出た。

5. 研究の成果

自分に自信が持てず、みんなの前ではあまり大きな声が出せなかったA君。1学期に初めて発表するときは、ちゃんと声が出せるか心配していた。やり終えた後のみんなの反響が嬉しかったようで、2学期からは堂々と発表できた。自信をつけたA君は、国語の学習「自分の考えを伝えるには」の単元でクラスの前でスピーチをおこない、パナソニック教育財団プレゼンテーションコンクール2018にも応募することができた。

特別支援学級ではよく話すが、交流学級ではほとんど声を出さないB君がフラッシュ教材づくりに挑戦した。他の児童は交流学級の教室で発表したが、特別支援学級の教室の方が彼のペースでできるだろうという配慮から、クラスの友だちに來てもらう形で実現した。緊張していたが、最後までやりきることができた。クラスメイトの中には、「初めてB君の声を聞いた」という児童もいた。

普段からiPadを家で使っているC君は、iPadの知識も豊富でこちらが思いもしなかったような方法を考えつく。例えば、Keynoteを使って作成した図形を分解したり動かしたりしながら、平行四辺形や台形やひし形の面積の公式が成り立つ理由をととても分かりやすく説明することができた。当初はフラッシュ教材を提示しながら問題を出すことのみを想定していた。児童が講義をすることまで予想しておらず、教師側の上をいく発想に驚かされた。（図2 5年生 面積の公式）

D君は、フラッシュ教材を作成する時に、社会見学で撮影した動画を見返しながら「伊丹工業団地っていう名前、今覚えたわ」と発言するなど、教材を作成することが自分自身の学力向上に役立った。（図2 3年生 市内巡り）

振り返りで自分が発表している動画を見て「ここはもっと字を大きくした方がいい」「アニメーションを使い過ぎてごちゃごちゃになってしまった。もっとシンプルにした方がいい。」等、主体的に効果的なICTの活用方法について考えることができた。

発表の後で、クラスみんなにフラッシュ教材のメイキングムービーを見せると、「おー！」「すごいっ！」と感嘆の声が上がった。心から出た「すごいね」という反応に、発表した児童も嬉しそうだった。

みんなの前に立って話をする経験を積むことができ、クラスみんなから認められて自信を持つことができた。また、交流学級の児童にとっても、特別支援学級の良い面を見直すきっかけになるだけでなく、普段と違った状況で学習することにより全員が挙手する等いつも以上に授業に集中することができた。

何よりの成果は、発表を終えた児童の満足げな表情だった。やり終えた児童の表情を見て、この実践で児童の自己有用感を高めることができたことを実感した。こういった一つ一つの成果を積み重ねていくことで児童は自信を持ち、そこに自分の居場所を感じられるのだと思う。

6. 今後の課題・展望

一通り学習が完了してから教材作成に入っていたため、クラスでの発表がどうしても学期末になってしまった。テスト前に発表できれば、それがテスト勉強になり、みんなの役に立っているという実感がさらに高まると思う。そのためには、スピーディーに教材作成をする時間を確保する必要がある。

一方、子どもは難しい問題を作りたがるが、あまり難しい問題を出しすぎると全体の流れが止まってしまう。また、実践をする中で、フラッシュ教材は短時間だと集中して学習することができるが、5分を過ぎるとだんだん飽きてくることが分かった。難易度や問題量は、ある程度教師側が調整する必要があると感じた。

今はまだそこまでは至っていないが、近い将来交流学級の子どもから、「どうやって作るの？」という声が

上がり、特別支援学級児童がそれをみんなに教えるという状況が生まれることを夢見ている。そんな風に、これをきっかけにしてさらなるクラスでの居場所作りに繋げて欲しい。

7. おわりに

特別支援学級在籍児童の発表を見て、学級独自でフラッシュ教材を作成する担任も出てきた。そういう意味では、「特別支援学級から広がるICT」が実現できつつあると思えた。

フラッシュ教材の下にヒントをつける（図2 全学年 単位の換算）等、子どもたちの工夫を見て「なるほど、この手があったか」と、こちらが学ばせてもらうことが何度もあった。この実践を通して、子どもたちが楽しそうに教材を作成する様子を見て、「教えることは面白い」という教師の仕事の根幹部分に改めて気づかされた。子どもと一緒に教材を作るということは、その子の苦手なところをどうすればみんなに分かってもらえるかを考えることになり、子どもに寄り添った教材作りをすることができた。

最後になりましたが、平成30年4月27日に行われた、平成30年度（第44回）実践研究助成「助成金贈呈式」のグループディスカッションで大阪教育大学の寺嶋浩介准教授より、「特別支援学級に在籍する様々な特性を持った児童のそれぞれに合わせた個別の児童の目標を具体的に考えてみてはどうか」とアドバイスをいただきました。それを受けて、当初は学年毎に作成しようと考えていたフラッシュ教材をそれぞれの児童に対応する形で作るようにしました。学年ごとにではなく、個別に教材を作成したことでそれぞれの児童の教育ニーズを踏まえた実践をすることができました。また、グループディスカッションで一緒させていただいた京都教育大学附属桃山小学校の木村明憲先生には、本校の校内研究会と市内発表会の二度に渡って講師として来ていただきました。

この実践研究助成により、ICT環境の整備だけに留まらず、私たち自身の学びの場を提供していただき、全国の素敵な実践をされている先生方と出会う機会を得ることができました。

貴重な機会とともに研究を助成して下さったパナソニック教育財団には、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

8. 参考文献

・文部科学省「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm

・キャリア教育ラボ『平均学習定着率が向上する「ラーニングピラミッド」とは』

<https://career-ed-lab.mycampus.jp/career-column/707/>